

序 言

この画像集は、外国人の目から見たさまざまな日本像を集成したものである。

日文研では創立以前の創設準備室発足（1986年）から、外国人による日本旅行記や日本見聞記などを含め、外国語で書かれた「日本研究書」の収集をおこなってきた。海外諸国から「日本はどう見られていたか」、「どう思われてきたか」を知るための資料としてである。そして「外国語で書かれた日本研究書」を略して「外書」と名付け、この収集を日文研の図書・資料収集の中心に位置付け、取り組んできた。外書は日本がどう見られてきたか、日本が海外からどう理解されてきたかを知る大事な文字資料である。

そして同時に、これら外書に掲載されている挿絵に我々は注目した。挿絵に描かれた「日本」には、文字では表せない外国人の日本イメージが込められている。たとえ日本の絵やその他さまざまな日本の図像が利用されていたとしても、それを採用する「選択」の目の中におのずと外国人の日本イメージは現れる。そう考えて、我々は外書の中の挿絵など画像を「外像」と名付け、それらを写真やデジタルデータとして取り出し、画像のデータベース化を進めてきた。時代をまず、日本が開国して海外に知られるようになる1854年から19世紀の末1900年までとし、日文研が収集した外書から「外像」を順次取り出した。こうして、データベースに登録されている「外像」の総数は5万5千件を越す（55,060件、2007年3月現在）。

データベースとして収録されている画像の数が5万5千件というと、これはかなりのデータ量になる。日本国内でこのデータベースを検索しても、データ量の重さに左右されて、必要なものを取り出すのになかなか時間がかかる。ましてやこれを海外で検索するとなるとデータの転送が長時間になり、途中で検索・データ転送が打ち切られることも起きる。そもそもデータ量が多いために、まったく検索ができない場合も起こる。私自身イギリスやドイツをはじめヨーロッパ諸国で検索を試み、まったく検索できなかったりまたじつに使い勝手の悪い体験をした。中国、タイ、ベトナムなどのアジア諸国でもさらに検索の困難さを体験した。

コンピュータ環境が整っていなければ（そしてたとえ整っていたにしてもデータの多さによる転送困難があって）せっかくのデータベースが、とくに海外では利用しにく

い事態がおきていた。電子データによる情報は万能ではなく、これだけに頼ってはいけないと痛感した。そこでコンピュータを通じた電子検索が容易でない地域や、たとえ検索は容易であっても多くのデータを一举に俯瞰することが難しい地域にいる研究者が、「外像」を一覧できる方法はないだろうかと考えた。その一つの方法が印刷物の形で提供することである。現在収集できた「外像」の全データを提供することは日本研究支援にとっても有意義であろうと考え、編集を行った。本冊子の掲載画像は小さいが、これを手がかりに外像データベースを検索して必要な外像の詳細画面にアクセスすることが容易になる。

また、この冊子自体をざっとめくっていただくだけでも、海外における日本のイメージがどのようなものであったかの一端はつかめるであろう。「海外日本像集成」と題したゆえんである。

編集代表 白幡洋三郎